貸借対照表の見方、説明の仕方

我々は「損益計算書」の読み方、説明の仕方は知っている。いわゆる儲かったのか損したかが書いてあるからだ。誰しも「売上－コスト（費用)」が「利益(儲け)」ということを知っているからだ。専門家の説明も会計に疎（うと）い素人の説明も大差がない。

ところが貸借対照表を目の前にすると、専門家でさえ、なぜか戸惑うことになる。現金を始め資産の名前とともに列挙されている。負債も同様だ、さらには資本（純資産）も同じだ。ある時点で「これだけあります」としか言えない。あるいは「現金預金がこれだけなのに借入金はその倍もある」と言った比較して何らかのコメントを述べると言うようなことしか説明できない。この現象は何処からくるのだろうか。

実は、「貸借対照表」の重大な本質の理解が出来ていないからだ。「貸借対照表」は会社の「歴史の書」という考え方の不在だ。

会社が誕生した時の例を取ろう。資本金 1 円で出発したとしよう。その時会社には「現金預金 1 円資本金 1 円」しかないのだ。そこで、時が経ち 50 年会社が続いたことにしよう。さて貸借対照表を見てみよう、様々な資産と負債とその差額（資本）が左右同額になって多くの種類（勘定科目）とともに美しく記載されている。

ここで重要なのは、すべての残高は誕生以来の 50 年間に増えたものばかりなのである。たった 1 円で始まったのであるから。そのように考えるといずれの勘定科目にも 50 年の歴史があるのである。「増えて減って」を繰返し、残があるということは結果「増えた」のである。資本金の残は増資（減資）の結果であり。利益剰余金は 50 年間の利益の累計額であり。預金は 50 年間の無数の預入と引出の結果の残なのだ。どんな些細な科目残でもこの 50 年に生じたものだ。「貸借対照表」を「損益計算書（たかが 1 年の動き)」のように考えると面白くないものとなってしまう。どんな大きな上場会社の決算書でも、原理は同じだ。さてその増減には 50 年のその時々の景気（波のようなうねり）がある。いつ生じ、いつ増え、いつ減ったのか、50 年の「貸借対照表」が「歴史書」たる所以だ。50 年間の「貸借対照表」は歴史絵巻のようだ。すべての貸借対照表の勘定科目が歴史を持っている。会計専門家は今まで勘定科目間の割合やその良否、あるいは他社との比較に重点を置きすぎた故に、貸借対照表の見方や説明の仕方に「重み」が感じられない。
売掛金一つを例にとっても、急に増えた年には「何らかの出来事」が刻まれているはずだ。新方法！他社比較では同じころに誕生した会社と現在の「貸借対照表」を見比べるだけで良い。各社「天と地ほどの差」があるはずだ。流動比率、粗利益率、営業利益率などの比較が影を潜めるほどだ。

同時代の企業と比較すれば(異業種比較でもいい)、自社の弱点、あるいは特徴がものの見事に認識できるはずだ。損益計算書は Up Down 方式経営分析でその都度「栄枯盛衰」が明らかとなるが、貸借対照表は、誕生 10 年、20 年、30 年、〇〇年とほぼ同時期の企業を比較してみると、会社や業種の優劣が測定できる。貸借対照表の Up(成長) Down(衰退) 方式経営分析の「見え過ぎる財産分析」として提案する。